

駅

高橋 憲昭

「駅」のホームに立つと、少年は、何時も特殊な感覚に満たされた。長く伸びる鉄路の平行線の鈍い光を先に追うと、やがて列車が小さく現れ、大きくなり、金属音とともに目の前に停車する。人が降り立ち、人が乗り、列車が動き、やがて消えていく。煤煙の臭いが残り、そのあとには、さっきと同じ二本のレールが長く地平までつながっている。軽い心の震えと哀しさが襲ってくる。

六十年前、少年の住む村の近くに位置する京都と奈良を結ぶ関西線の「新田」駅と少年の関わりはそうのように始まった。興奮とおののきと哀しさが襲ってきた。理由はわからない。遠く鉄路の消えていくその果てに広がる別の世界を夢見ていたのだろうか。或いは、まだ見ぬ世界への憧れと不安が心をときめかせたのかもしれない。確かに、鉄路は外の世界へ少年を運んでくれた。しかも、より遠くまで運んでくれる道であった。閉じられた田舎の村、その寺の長男息子という、狭い世界のなかで、閉塞感に押しひしがれていた好奇心に満ちた少年の心を、はるかな世界へと解き放ってくれる魔法の道だったのかもしれぬ。田舎の風土の生活は、すべてが柔らかく、土と緑の世界であった。その世界から抜けて、「新田」駅のホームからみはるかす長く伸びる鉄路は、鈍く光り、それは、少年の住む軟質の世界では経験できない全く異質なものであった。硬質の金属から受ける刺激は異常に強く心に印象づけられた。

当時、少年にとって、はっきりイメージしうる唯一の外の世界は母親の郷里しかなかった。遠い外の世界は、そこをとおして見えてくるエキゾチックな世界であった。幾度か「新田」駅から母に連れられて母の郷里に里帰りした。それはエキサイティングな出来事であった。列車が駅をゴトリと離れるとき、少年の痩せた小さい華奢な体に伝わってくるゾクッとするような感触は、今も体のどこかがはっきりと覚えている。その時の石炭の煤煙やその臭いが鮮やかに

目のまえにある。単調な生活世界から離れていく、そこには、言い表せない解放感と興奮があった。一時的ではあるが生活の場との別れである。日常的世界から非日常的世界への旅立ちである。父は見送ることは全くなかった。だから、駅での別れは人との別れではない。少年にとって、駅の原風景は、出会いの場でもなく場所との別れのイメージが強い。しかし、同時に、それは、まだ見ぬ刺激に充ちた異界への出発の場であるという心浮き立つようなイメージとオーバーラップしているのである。

別れといっても嫌悪する世界から離脱して希望の世界への出発のための別れもあれば、その逆の別れもある。別れはすべて哀しいが、別れた後に予想されるその人の在り様が、別れをさまざまに彩るのである。将来の希望、これから開けるであろう世界への希望が、別れの哀しさを打ち消すこともある。また、昏い予想が別れの哀しさを倍加することもある。だが、今時の駅には、このような情趣はない。世界は開かれ、交通、通信が発達し、外の世界が消えた。遠い外国は存在しなくなった。

けれども、やはり駅は人生のさまざまな出会いと別れが演じられる舞台である。演じられる出会いと別れの内容は、社会の複雑性を写して単純なものではない。多様な人生模様がそこにはある。人々の世界の結節点として駅は今日も悲喜交々、人々のそれぞれの思いに彩られている。

出会いと別れが、大規模にしかも不自然に、非日常性に支配されるときもある。イギリス映画の名作「逢いびき」は、第二次世界大戦末期の1946年、戦火のなかで作られた。ロケ地は、イギリスのランカスターの片田舎のカンフォース駅であった。物語は、日常の細部を丹念に積み重ねていく手法で描かれる。駅のホームで汽車の吐き出す煤がローラの目に入り、居合わせたアレックに手当てしてもらおうという出会い。知人にばったり会ってしまい、互いに言葉を交わせないまま汽車に乗る最後の別れ――。淡々とした映像の効果もあり、物語は、だれの身にも起きそうな現実感を伴って展開する。アメリカ映画に見られる、子供っぽい娯楽性とは一味違った落ち着きが、作品全体を包む。爆発的な人気はでなかった。が、モノトーンの画面に凍りついてしまうような切ない愛が、観衆の心を静かにとらえた。封切られて二年、三年とたつうちに、評価はゆっくり高まっていった。駅を舞台とする出会いと別れの静かな愛の抒情詩である。

これはフィクションではあるが現実の出来事として起こりうる可能性を多く秘めている。ロイ・トンプソン氏はカンフォース駅に46年間勤務したカンフォース駅の最後の駅長だった。訪れた記者（1993.8.23／朝日新聞：福島申二記者）に、「駅というものは、あんた、実に哀しいところだよ」といった。「逢いびき」が撮られたカンフォース駅では、出征する兵士と見送る妻たちの愁嘆場が毎日のように繰り広げられたという。トンプソン氏は言葉をついだ。「あの駅にはね、墓場よりもっと多くの怨念が染みついているんだよ。別れは、なにも「逢いびき」だけの話じゃない」

駅には、多様で、異質な出会いと別れの凝縮した人生の縮図がある。会者定離という仏教語がある。会えば必ず別れがある。これは自然の理である。別れは必ずくる。早い遅いの違いはあるが絶対にそうなのである。すべての人に、それは平等に与えられている。多くの別れのなかでも決定的な別れは死である。死の別れには、深い哀しさと諦めがともなうが、人はその向こうにロマンを見つめることもあろう。しかし、駅での別れには不確定性がある。また会えるかも知れぬし、或いは会えないかも知れない。ほとんど会えない状況にはあるが、絶対に会えないとはいえない。百万分の一に賭ける希望と不確定性の不安が入り混じる。別れの淋しさと哀しさと、その百万分の一への希望と不安が混じりあって人の心の感傷を誘う。駅での別れには、カンフォース駅の駅長であったロイ・トンプソン氏がいうような悲愴な別れもあるであろう。しかし、流す涙は、死の別れの涙とは異なるのである。

文明の進歩は、駅から人の心に滲み入るようなエキゾチシズムとセンチメンタリズムとロマンと哀しみを奪うように思える。人は、本来、未知なるもの、不可思議なもの、神秘的なものへの好奇心と憧れを持つ動物である。それへの接近の欲求と努力からくる緊張感が人の命を支えている。異質なものの、非日常的なものへの憧憬が命の営みには必要なのである。宇宙は、正と反の因子で構成されている。人間の生活世界の正一反を光と影に喩えれば、此の世には光と影があり、光によって影が生じ、影によって光の存在を知る。影のない世界は無の世界である。それは、此の世ではない。影のある世界は、形のある生命体や物体の存在する世界である。出来事が起こる世界である。それが、此の世である。人は、此の世の光と影の両価性のバランスの上に生きている。現代の科学

文明をもたらした、いわゆる科学的分析法といわれる方法論への過度の帰依は、或る領域における光と影の両価性のバランスを崩しつつある。今まで窺い知ることのできなかった影の深い闇の奥底が明るみに曝されようとしている。畏れおののきながら闇の向かうに未知なるもの、不可思議なもの、神秘的なもの的大きい力を感じ、それに触れようとした人間の真摯で、謙虚な姿はもはやみられない。影の闇の領域が光によって侵食されつつある。しかし皮肉にも、闇に光を当てれば当てるほど、闇の領域は広がるばかりである。科学の目が宇宙の拡がりをつえれば捉えるほど、宇宙の闇は、さらに無限に広がるばかりである。無限の時間と空間が宇宙であるとすれば、人はそれを具体的経験として把握しえないし、これからそうであろう。人間の生活世界が時間と空間の有限性の上に成り立っているからである。ただ、ここでいえることは、時間と空間の無限性の彼方に不可思議なもの、神秘的なもの、聖なるものをみ、それへの畏れを感得するか、それとも、時空の無限性を、科学的方法で分析可能な対象物として見続けるかが、これからの人間という類のあり方を大きく変えるであろう。

少年は、幼い頃、村のすぐそばを流れる木津川の堤防の斜面の柔らかい草のなかに仰臥し、透きとおるような蒼空に浮かぶ白い雲を眺めながら、空の向こうに何があるのだろうか。地球が空に浮かんでいるのはなぜだろう。と、その不思議さに心を打たれたが、その感動は今も消えていない。むしろ、それへの不思議さと畏れはつものばかりである。六十年を経たいま、かつて、春には桃色の、初夏には真っ白い絨毯を敷き詰めた桃畑や梨畑は工業団地に変わり、大小の工場が建ち並んでいる。草深い田舎の面影はない。母に連れられ、母の郷里に里帰りする出发点であり、また少年にとって初めての外の異界への旅立ちの場であった「新田」駅を過る関西線は電化された。煙を吐き汽笛を鳴らし重たげにガタゴト走る汽車の姿は見られない。寒い音もない凍える冬の夜、針仕事の手を休め、「新田」駅を通過する夜汽車のかすかな汽笛に耳をそばだて、遠くを眺めるような眼差しで、母は少年に語りかけた。「ああー汽笛が聞こえるね——、あの汽笛を聞いたたびに、私は故郷を思い出すんだよ——」。母にとっては「新田」駅は、生活からの別れの場であると同時に故郷との出会いにつながる場であった。駅は故郷への渇くようなノスタルジアと離れがたく結びついていたのである。

「新田」駅は通過駅である。始発駅でも終着駅でもない。生活のロマンを多く持つ駅は、始発駅と終着駅である。考えてみれば、人は此の世を旅している。始発駅で「此の世」行きの汽車に乗せられたのである。此の世のどこを旅する汽車に乗るかは前もって決められている。また、そこでのあらゆる出会いは選択を許されない絶対的なものである。その運命的な出会いを抱えたまま、人は、此の世に敷かれた線路の上を列車に乗って旅をする。いい席に座る人もあれば、悪い席の人もある。はるか彼方の終着駅に着く前に、途中下車をしてそれぞれ独りの旅をもち、代替不可能な経験を重ねて、もとの列車に乗りこまねばならない。列車は、再び絶対に逆行不可能な線路の上を、思い出に彩られながら終着駅に向かうのである。終着駅に降り立ったとき、過ぎ去った旅路は、それがどのようなものであろうとも、一種の、或る安堵とともに懐かしい風景としてよみがえる。

こうして、旅を終えた人は、再び家郷へ還らねばならない。家郷をでて始発駅から汽車に乗り、旅を終えて終着駅から家郷に還るのである。母は、「新田」駅を通る汽車の遠いかすかな汽笛に故郷を想ったが、人は此の世の旅路の果てに無限の時空のなかの家郷へ還って行く。懐かしい生の根源へと還るのである。かつて、少年は、母に連れられて「新田駅」から母の故郷へ旅立った。少年にとって、それは胸震える異界への旅立ちであった。いま、少年の乗った「此の世」行きの汽車は旅の終着駅に近づいている。振り返ると、少年が乗って旅してきた汽車の線路がみえる。少年はいまも走り続ける汽車の上から、曲がりくねった線路をみつめる。線路の先は、はるかな地平に消えているが、消えて見えない線路も、少年には、はっきり見える。その上には、紆余曲折、悲喜交々、繰り返すことのできなかった一回きりの旅の風景が回り灯籠のように、鮮やかに駆け巡っている。人や物や出来事の出会いが二重写しに重なってみえる。少年の乗った汽車は長い旅を終え、ほぼ予定の終着駅に到達しようとしている。しかし、と、少年は考える。もし、もっと早い時間の汽車に乗せられていたとしたらどうだったろうか。また、もっと遅い汽車であれば――。少年は、ふと、学生時代に、歴史に「若しも」という仮定が許されるならば、歴史はどう変わっていたであろうというテーマで書かれたエッセイを読んだことを思い出した。その冒頭には、もし、クレオパトラの鼻が三センチ高ければ、或いは、低けれ

ば、歴史はどう変わっていたであろうか、という仮定の歴史が描かれていた。少年は思う。少年が、もう数年早く汽車に乗せられていたら、その後の旅はどうなっていただろうか。おそらく一兵士として、戦場に駆り出され、飢えや渇きや病気に苦しみながら、灼熱の南島の山のなかの地獄の修羅場で、激しく故郷を恋いつつ旅を終えたかもしれない。もしも、一段上のクラスの汽車に乗せられていたら、もう少し素晴らしい旅ができたかもしれない。もし、もっと努力をしていれば、あの決定的なチャンスを生かしたかもしれない。そうすれば、その後の旅の様相は、きっと大きく違ったものになっていた筈である。芭蕉の「旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる」の句ではないが、いまも、少年の胸のなかには、「若しも」の仮定の論理が、果たせなかった夢として、或いは運命的な諦観となって、過ぎ去った旅の風景とともに駆けめぐっているのである。

人の旅は多様である。どの汽車に乗せられたかによっても旅は異なるし、また、同じ列車で旅する人も、当初は自信に満ちていた人が、旅の終わりには憔悴しきっていることもある。逆に、弱々しく不安げだった人が、自信に満ちて終着駅に降り立つ場合もある。始めも終わりも幸福に過ごす人もいる。その反対もある。また、旅の過程では、その後の旅に大きい影響を与える出会いがある。その形と内容は、人によって千差万別である。また、同じ一つのことをすべての人に同じ影響を与えることもあろうし、そうでないこともある。それは人の世の常である。出会いは旅を大きく変える。人にしろ、事柄にしろ、出会いには、自分の力ではどうしようもない、それこそ運命としかいいようのないものと、そうではなくて、自分が因となって、もたらされるものがある。どちらにしても、特に、人との出会い——（邂逅）——は、旅人にとっての旅の存在意義に決定的に関わってくる。人間として上質な人に出会えるかどうかは、それが、同僚であれ、学友であれ、友人であれ、夫であれ、妻であれ、愛人であれ、先輩であれ、後輩であれ、上司であれ、部下であれ、その後の旅の質を決める。悪い環境の旅にあっても「善き人」との出会いがあれば、旅は幸福に充ちたものとなる。良い状況の旅だとしても、「悪しき人」との出会いは旅を苦難に満ちたものにする。こうして、長い道程を旅してきた少年は考える。人間独りの掛け替えのない旅において、その意義を最後に決めるのは「善き人」と出会いである。「善き人」と共に旅をして終着駅に降り立つことが、その人

にとつての旅の「善き完成」である。そして、そのときにこそ、長い命の旅は「善き旅」となって光芒を放ち至福の時間に輝くのであると。

少年を乗せた汽車は、終着駅に近づこうとしている。そこまでの正確な距離はわからない。旅を続けて、齢を経た少年は、いまでも、母と共に「新田」駅に立ったときの、幼い心の毀れるばかりの昂ぶりと、まだ見ぬ異界への震える憧れを失っていない。木津川の堤防の草原に仰臥しその薫りにむせながら、白い雲を浮かべる蒼い空の向こうに不思議さを感じた少年は、これから、どのような旅をしようとするのであろうか。やがて到着する旅の終着駅にどのように降り立とうとしているのであろうか。そして、雲流れる蒼穹のはるか彼方の時空のなかの、還るべき故郷に何を見ているのであろうか。

(1998／8／16：お盆送り火の夜)

(たかはしのりあき 華頂短期大学学長)